

社会福祉学研究科 修士課程 担当教員・科目概要

| 科目名 | 分野名 | 概要 | 担当者 | |
|--------|----------|--|--|--------|
| 必修科目 | 社会福祉学特論 | 「当事者本位」「利用者本位」の視点に立ちつつ、家族、福祉施設、介護のあり方（いかにあるか）と本質（何であるか）の研究を通して社会福祉の理念を探究する。福祉現場と当事者の状況に対する理解を深め、家族（親）に関しては「当事者の視点」「親族扶養の視点」「愛の視点」から、福祉施設に関しては「当事者の視点」「保護主義の視点」「非対称性の視点」「ノーマライゼーションの視点」から、介護に関しては「自立の視点」「自立支援の視点」「介護保健の視点」から、それぞれ視点を変えながら各契機のあり方と本質を考察する。さらには、従来の福祉思想と関連づけて総合的な社会福祉理念を探究する。 | 栗栖 照雄 | |
| 専門選択科目 | 社会福祉学特論Ⅰ | 障害者福祉論 | 本講座においては、臨床ソーシャルワークの視点から発達障がい（学習障がい、知的障がい、軽度発達障がい等）を有する子どもの発達援助にかかわる研究を行う。まず、子どもの発達障がいと発達についての基本的研究を行い、次に発達障がい児とその家族への援助について検討する。さらに学令期における地域での福祉的支援、そして、社会生活における福祉的支援についても検討する。 | 山口 洋史 |
| | 社会福祉学特論Ⅱ | 福祉カウンセリング論 | 心のケアという観点から、障がい者や高齢者に対人援助を行っていく関わりがカウンセリングである。そのカウンセリングの理論、技法そして展開過程について論じる。さらに、具体的な事例を取り上げ、それをどのようにカウンセリングしていくか、悩みの解消や問題提起への道筋を検討した後、カウンセリングの進め方、カウンセラーとクライアントとの係わり方等について学習を行う。 | 高山 巖 |
| | 社会福祉学特論Ⅲ | 研究法・調査法 | 本特論では、社会福祉領域の研究者が不得意と思われる量的研究を中心に社会福祉学の研究方法を学ぶ。内容はだまかに、（１）統計学の基礎的知識（２）量的データ収集の方法の２領域に分類できる。最初の統計学の基礎であるが、場面に応じた適切な分析方法の選択ができるようになることを目的とする。次に量的データ収集方法であるが、質的研究と量的研究の概念的理解から始め、量的研究のデータ収集、サンプリング技術、分析方法を体系的に学び学位研究を超え、受講生諸君が今後の研究に役立たせることが目的である。 | 三宅 邦建 |
| | 社会福祉学特論Ⅳ | 高齢者福祉論 | 高齢者福祉学を学ぶにあたって必要となるのは次の３つの柱であると考えられる。すなわちⅠ高齢者の心身特性を背景とした社会的特性Ⅱ高齢者福祉社会保障施策の歴史と現状Ⅲ高齢者ソーシャルワークである。本講義ではⅠに関して高齢者虐待をⅡに関しては介護保険制度をⅢに関してはソーシャルワークにおけるケアマネジメントの位置づけを学ぶこととする。これらを通して高齢者福祉学を研究する導入としていきたい。 | 山崎 きよ子 |
| | 社会福祉学特論Ⅴ | 東洋介護福祉論 | 日本で紹介されている介護あるいは社会福祉思想および活動の多くは、西洋の文化を背景に、また科学的根拠をベースに構築されている。一方で、医療や福祉は、文化との密接な関係の上に構築される側面を持つ。本講座では東洋（医学）思想の基本的概念を学習し、介護、社会福祉を東洋（医学）思想から捉えることにより、文化と密接に関連した介護福祉理念の構築を試みる。 | 渡邊 一平 |
| | 社会福祉学特論Ⅵ | 社会福祉計画論 | 社会福祉計画（social welfare planning）の方法、社会福祉問題が存在する理由、そして社会福祉問題の定義の方法。社会福祉問題解決プロセスの方法と評価の仕方。コミュニティ理論とコミュニティの重要性。地域福祉計画グループ（community welfare planning group）を設立し、情報を集め、計画を展開していく方法。地域福祉プログラム、地域福祉オーガナイゼーションの展開を実行。 | 塚口 伍喜夫 |
| | 社会福祉学特論Ⅶ | 身体健康福祉論 | わが国では高齢化が急速に進んでいる。高齢期になっても健康で生き生きとした生活を送ることは我々の願いである。「健康」を維持・増進するためにはその土台となる身体自体の理解や健康に及ぼす身体活動の有効性、そして社会生活の中にもみられる様々な身体活動について考えるということが求められる。これらの基礎を確認することが本講座の目的である。 | 小川 芳徳 |
| | 社会福祉学特論Ⅷ | 看護福祉論 | 子どもの医療における意思決定に際して、インフォームド・コンセントが推進され、病気の子どもの自己決定を尊重してQOLを高めることが重視されてきている。子どもの自己決定は大人とは異なり、自己決定を developing autonomy として捉えて、その成長を前向きにサポートして実現できると考える。ここでは、病気・障がいをもつ子どもと家族に対して、病気や障がいと共存するためのセルフケアを促進し、人生における自己決定を可能とする支援について検討する。そのため、教育、福祉、保健医療が協働して子どもと家族の支援を行なう必要性とその方法についても検討する。 | 田辺 恵子 |
| 総合科目 | 特別研究 | 研究を行うのに必要な手続きや方法等について、短期集中により院生を指導し、研究の成果を論文に纏める。具体的には、修士論文作成のための先行研究の指導を行う。特に文献の検索や読解力を養い、院生の思索能力向上に努める。本講の流れとしては、事前に電子メールで研究到達度を把握し指導を行っていく。そして、面接授業時には仮説を立案し、リサーチを行う院生は調査の研究を、文献研究を考えている院生はその構想を立案・検討させる。そして、研究の進捗状況に沿って集中的に必要な指導と援助を行う。 | 秋葉 敏夫 小川 芳徳 栗栖 照雄 正野 知基 藤田 和弘 三宅 邦建 山口 洋史 山崎 きよ子 渡邊 一平 | |